

## 霍光から王莽へ (2)

狩 野 直 禎

### 一〇

前節にも述べたように、武帝は周公が成王を背に負うて朝貢を受けるの図を画かせて、霍光に与えた。それは自分の死後、幼い弗之（昭帝）が即位することになるが、その時には霍光が弗之にたいして、丁度周公が成王に果たしたと同じ役割を演ずることを期待するとの意味であった。武帝自身が霍光にそう説明している。このような事が行われているというのは、周公が幼い成王を輔佐して周の政治をとつたのであるという考えが広く通行していたことを示すのであろう。周公が幼い成王を輔佐したという前提がなければ「周公、成王を負うて諸侯の朝を受く」の図を画いても、理解されにくいのである。

では前漢初期において、周公はどのように理解され、評価されていたであろうか。これについて少し考えてみたい。単に霍光だけに關することではなく、王莽にも大いに關わる事だからである。

また漢代の人々の周公像を追っていくと、当然のことながら、漢代人が周公を含めて歴史上の人物に、或いは過去に生起した、もしくは生起したと信じていた歴史事実を、どのように評価していたかということを、考察の外にすることができなくなる。それで周公を含めて、一般に漢代人が抱いていた歴史像をあわせて追及してゆくことになるで

あろう。

## 一

まず最初に注意されるのは、史記卷八十八蒙恬列伝である。蒙恬の祖先は斉の人であったが、祖父蒙驁は秦に来て昭王に仕え、始皇帝の七年に卒するまで、四回出陣し四勝を収めた。父の蒙武も亦武將として活躍した。歴代武將の家に生まれた蒙恬も、対匈奴戦に輝かしい武勲を収め、蒙氏の秦国内における地位は重いものになっていた。蒙恬の弟蒙毅は上卿に任じられて内謀に當った。

この蒙氏に對抗し、その力を抑えようとしたのが、宦官の趙高である。彼は二世皇帝胡亥に取り入り、丞相李斯を誘って仲間に入れ、蒙恬兄弟をおとし入れようとした。胡亥の甥の子嬰のように、忠告するものもあったが、聞き入れられず、蒙恬兄弟は二人とも獄につながれることになり、やがて非業の死をとげる。即ち毅は獄中にて殺され、恬は自殺したのである。

ここに引く文は、二世皇帝の使者に向つて蒙恬が自己の信念を述べ、一步も引かぬ決意を示した所である。

(1) 「自吾先人、及至子孫、積功信於秦三世矣、……昔、周成王初立、未離襁褓、周公旦負王以朝、卒定天下、及成王有病甚殆、公旦自揃其爪、以沈於河曰、王未有識、是旦執事、有罪殃、旦受其不祥、乃書而藏之記府、可謂信矣、及王能治國、有賊臣言、周公旦欲為亂久矣、王若不備、必有大事、王乃大怒、周公旦走而奔於楚、成王親於記府、得周公旦沈書、乃流涕曰、孰謂周公旦欲為亂乎、殺言之者、反周公旦、故周書曰、必參而伍之、今恬之宗、世無二心、而事卒如此、是必孽臣逆亂、內陵之道也、夫成王失而復振、則卒昌、桀殺閼竜逢、紂殺王子比干而不悔、則身死國亡、臣故曰、過可振、而諫可覺也、察於參伍、上聖之法也、

(吾が先人より子孫に至るに及ぶまで功を積み、秦に信ぜらるること三世なり。……昔周の成王の初めて立つやいまだ襁褓を離れず。周公旦王を負いてもって朝し、ついに天下を定む。成王の病有りて甚だ危うきに及び、公旦自ら其の爪を揃りてもって河に沈めて曰く、王いまだ識あらず、是れ且事を執る。罪殃あらば、且その不祥を受けんと、乃ち書してこれを記府に蔵す。信というべし、王よく国を治むるに及び、賊臣言えるあり。周公旦、乱をなさんと欲すること久し。王若し備えされば、必ず大事あらんと。王乃ち大いに怒る。周公旦、走りて楚に奔る。成王記府に観、周公旦の沈書を得。乃ち流涕していわく、たれか周公旦乱を為さんと欲すと言えるかと。これを言う者を殺し、周公旦を反す。故に周書にいわく、必ず参にしてこれを伍にせんと。今愷の宗、世々二心なし。事おおむね此くの如し。是れ必ず孽臣逆乱するは内陵の道なり。成王失するもしかも復振えば、則ちついに昌えたり。桀は閼竜逢を殺し、紂は王子比干を殺して悔いざれば、則ち身死し国亡ぶ。臣故にいわく、過は振うべく、諫は覺るべきなり。参伍に察するは上聖の法なりと。)

蒙恬は蒙氏の一族が秦の爲めにつくした功績をもつて、ひそかに周公に比し、二世皇帝が成王の歩んだ道をとおり、一旦は周公を楚に走らせたが、ふたたびこれと呼びもどして、周の基礎を築いたように、蒙氏一族を赦してくれなか、閼竜逢や比干を殺してしまった、桀や紂の過を繰り返すか、どちらを取るか迫ったわけである。

ここに周公旦が成王を負いてもって朝し、ついに天下を定むという記事が見える。武帝が霍光に賜った画と同じ主題の話が引用されているわけである。ここにおいては周公旦は臣下としての模範として強く印象づけられる。制作者としての周公は少くともこの文章に関する限り表面には出ていない。また史記卷四周年紀の周公についての記事ともことなっている。周公が成王を負ってもって朝したこと、周公が成王の病の平癒を祈って爪をきり河に沈めたこと、楚に亡命したことなどどれ一つとして周年紀には採用されていない。周公といってもその人々に与えるすがたには多

様なものがある。その多様性の中から、武帝が何故霍光にあのような画を撰択して賜ったのか、秦漢時代の古代観と比較しつつ論を進めたい。

## 二

秦漢時代の上限を秦王政の二十六年（紀元前二二一）即ち秦による統一の完成の年におくが、これは全く便宜的にすぎないのであって、もとよりこうした問題を政治的大事件のあった年で、きっぱりとわけることではできない。しかしこの秦王政二十六年の前と後では、考え方にかなりの違いが出ていることも、否定できない。

最初に三皇・五帝についてどのように見られていたかということを考えよう。

(2) 「丞相〔王〕綰、御史大夫〔馮〕劫、廷尉〔李〕斯等皆曰、昔者五帝、地方千里、其外侯服夷服、諸侯或朝或否、天子不能制、今陛下興義兵、誅殘賊、平定天下、海內為郡県、法令由一統、自上古以來未嘗有、五帝所不及、臣等謹与博士議曰、古有天皇、有地皇、有泰皇、泰皇最貴、臣等昧死、上尊号、王為泰皇、命為制、令為詔、天子自称曰朕、王曰、去泰著皇、采上古帝位号、号曰皇帝、他如議、制曰可、……制曰、朕聞、太古有号毋諡、中古有号、死而以行為諡……」（史記卷六、秦始皇本紀始皇二十六年条）

（丞相〔王〕綰、御史大夫〔馮〕劫、廷尉〔李〕斯等皆いわく。昔者五帝、地方千里、その外は侯服、夷服、諸侯或いは朝し、或いは否らず。天子制するあたわず。今陛下義兵を興し、殘賊を誅し、天下を平定す。海内は郡県となり、法令は一統による。上古よりいらい、いまだかつてあらず、五帝も及ばざるところなり。臣ら謹んで博士と議して曰く。古え天皇あり、地皇あり、泰皇あり。泰皇最も貴し。臣ら昧死し、尊号をたてまつる。王は泰皇となし、命は制となし、令は詔となし、天子は自ら称して朕といわんことをと。王曰く、泰を去らん。皇を著し、

上古の帝位の号を采り、号して皇帝といわん。他は議の如くせよと。制して曰く可と。……制して曰く、朕聞く、太古は号ありて諡なし。中古は号ありて、死して行を以て諡となす……)

これは天下統一後、秦王政が秦王の称号を去って皇帝を称するにいたった理由を述べた部分である。

ここではまず上古に五帝の時代の存在したことが提示される。五帝が何をさすかについては、さまざまの説がある。即ち、(一)太皞伏羲・炎帝神農・黄帝・少皞・顓頊(呂氏春秋十二紀・礼記月令)、(二)黄帝・顓頊・帝嚳・帝舜(大戴礼五帝徳・国語魯語・史記五帝本紀)、(三)少皞・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜(孔安国尚書序)、(四)包羲・神農・黄帝・堯・舜(三統曆)などである。丞相王綰らが五帝という語を使った時、そこにいかなる帝の名を含ませようとしたかは明かでない。時期から言って呂氏春秋の説によったとも考えられるが、これもあくまで推測の域を出ない。しかしここでは五帝の細い内容について議論を展開する必要はない。五帝時代が存在していたことが大前提になって、上奏文の議論が展開されていることを、指摘すればよい。

次に地方千里ということがある。これは取り立てて論ずることもないが、<sup>①</sup>

### (3) 「項王出之国、使人徙義帝曰、古之帝者、地方千里、必居上游、」(史記卷七、項羽本紀)

(項王出でて国に之き、人をして義帝を徙さしめて曰く、古の帝は地方千里、必ず上游に居る)

などの用例がある。この文はいうまでもなく、項羽が秦を滅した後、義帝を長沙の郴県におしこめた時、その正当性を主張する為に発したものである。

さて続いて上奏文は千里の外の地に侯服・夷服と呼ばれる区域のあることを言う。この侯服・夷服という言葉は五服・九服の中に見えるのである。五服は書経益稷、禹貢などに、九服は周礼夏官職方氏に出てくる。五服は侯服・甸服・綏服・要服・荒服を指し、王畿の外、五百里ごとに、これを配置する。九服は侯服・甸服・男服・采服・衛服・

襁服・夷服・鎮服・藩服を言い、やはり王畿の外五百里ごとに配列される。侯服は五服・九服いずれにも共通してあらわれるが、夷服は九服にしかその名称が見えないから、この上奏に当って、周礼夏官職方氏に述べられている九服説によって論が立てられたとしてよいであろう。だからといって、周礼がすでにこの時代に成立していたと主張するのではない。周礼が依拠したものと同じ系統の材料に、王綰らの上奏もよったであろうというにすぎない。

つづいて上奏は始皇帝の天下統一の事業こそは、この五帝の功業を越える、非常に画期的なしごとであるというように展開していく。五帝の時代は「諸侯或いは朝し、或いは否らず、天子制するあたわざる」状態であったが、今は「天下を平定し、海内は郡県となり、法令は一統により、上古よりいらいまだかつてあらず、五帝も及ばざるところ」というのである。

これは荀子あたりから系統を引く、後王思想の影響なども強く働いているに違いない。孟子などの王畿千里から演繹される議論とは径庭があるように感じられる。

ところで上奏文は一転して天皇・地皇・泰皇の名をあげ、泰皇もつとも貴しということを提示する。この天皇・地皇・泰皇の三皇が、五帝とどういう関係にあるのか、五帝と三皇をいづれかが、他の方より時間的により古くに存在したと考えてよいのか、この上奏文の中には判断をくだす材料がない。又、文の調子もはなはだしくあいまいである。ただ天皇・地皇・泰皇をもって、三皇五帝の三皇に当るとするのが通説である。三皇についてもいろいろの説がある。(一)天皇・地皇・泰皇説もその一つであるが、(二)天皇・地皇・人皇(河図)、(三)燧人・伏羲・神農(尚書大伝等)、(四)伏羲・神農・祝融(春秋運斗枢)などがあり、天皇・地皇・泰皇説は秦の博士の独自の説と認められている。

ところで秦王政（始皇帝）の実父と噂され、秦王政の治世の初期には、国政の実権を握ったのが呂不韋である。彼が食客三千人を集め、それぞれに見聞したことを著述させた。これを基として編纂したのが呂氏春秋であり、序意篇によれば秦王政の八年（前二三九年）に成立した事になる。<sup>⑨</sup>もともと現在の呂氏春秋には秦王政八年以後の記事が含まれているとのである。

呂氏春秋中にも三皇五帝と続けて用いた例をいくつか見出す。その内容は三皇五帝を一つの模範として見る立場に立っており、同じ秦でも、統一後の思想と非常にことなつたものを感じさせる。

「天地大矣、生而弗子、成而弗有、万物皆被其沢、得其利、而莫知其所由始、此三皇五帝之徳也、」（孟春紀貴公篇）

（天地大なり。生じてしかも子とせず、成してしかも有せず。万物皆其の沢を被り、其の利を得。しかもそのよりにて始る所を知るなし。此れ三皇五帝の徳なり）

この文章には三皇五帝の徳の広大なること言い、全体として道家的な主張が流れていることは一読して知られる。

「天下無粹白之狐、而有粹白之裘、取之衆白也、夫取於衆、此三皇五帝之所以大立功名也」（孟夏紀用衆篇）

（天下粹白の狐なし。しかも粹白の裘あり。これを衆白に取ればなり。それ衆に取るは、これ三皇五帝の大いに功名を立つるゆえんなり）

「凡救守者、太上以説、其次以兵、以説則承従多羣、日夜思之、事心任精、起則誦之、臥則夢之、自今卑辱乾肺、費神傷魂、上称三皇五帝之業、以愉其意、下称五伯名士之謀、以信其事、」（孟秋紀禁寒篇）

（およそ救守する者は、太上は説をもつてし、その次は兵をもつてす。説をもつてすれば承従するもの多く羣す。日夜これ进行い、心を事とし精に任ず。起きては則ちこれを誦し、臥しては則ちこれを夢む。自今辱を卑か）

肺を乾かし、神を費し魂を傷め、上は三皇五帝の業を称し、もってその意を愉ばせ、下は五伯名士の謀を称し、もって其の事を信にす

孟秋紀の文においては、三皇五帝の業と五伯(覇)名士の謀とが対として用いられている。

「夫孝三皇五帝之本務、而万事之紀也、」(孝行覽)

(夫れ孝は三皇五帝の本務にして万事の紀なり)

ここでは、孝が三皇五帝の本務、百行の本として取上げられている。儒教的な一条である。

なおこうなると、三皇・五帝ということが何時のころから言われ始めたかについても触れなくてはならないのであるが、本稿のそもそもの論題と外れるし、また特に成案を持たないので省略させていただく。<sup>⑨</sup>ここに一つ注意されるのは、注①や注④さらに九服についての本文で見たように、周礼の説がかなり関係していることである。左伝によつて劉氏堯後説が主張されることなどと併せ考える時、秦・漢初の思想或いは政治の動向を考えるのに一の問題を提起するよう思う。

ついでに言うと、呂氏春秋には三皇が何をさすかについての具体的な説明は何も見出せない。高誘が三皇とは伏羲・神農・女媧であると注しているのは、高誘の生きていた後漢時代の説であつて、呂氏春秋そのものに、こうした考えがあつたのではない。

## 一四

三皇五帝という表現より、用例として多いのは五帝三王という語であること、秦代においても例外でない。

- (4) 「作琅邪台、立石刻、頌秦德、明德意、曰、……功蓋五帝、沢及牛馬……列侯武城侯王離(等)与議於海上



曰、古之帝者、地不過千里、諸侯各守其封城、或朝或否、相侵暴亂、殘伐不止、猶刻金石、以為自紀、古之五帝三王、知教不同、法度不明、假威鬼神、以欺遠方、實不称名、故不久長、其身未殁、諸侯倍叛、法令不行、皇帝并一海內、以為郡縣……」(史記卷六、秦始皇本紀三十八年条)

(琅邪台を作り、石刻を立て、秦德を称し、徳意を明にして曰く……功は五帝をおおい、沢は牛馬に及ぶ……列侯武城侯王離「等」ともに海上に議して曰く、古え帝は地千里にすぎず、諸侯おのおのその封城を守り、或いは朝し或いは否らず。相侵し暴亂し、殘伐やまざるも、なお金石に刻してもって自紀をなす。古の五帝三王は知教同じからず、法度明かならず、威を鬼神に仮り、もって遠方を欺く。実は名に称わず。故に久長ならず、その身いまだ没せずして、諸侯倍叛し、法令は行われず。今、皇帝は海内を并一し、もって郡縣となす……)

始皇帝は即位の二十八年(紀元前二一九年)に、琅邪山に巡行してその山頂に頌徳紀功の碑を作った。有名な琅邪台刻石であるが、ここに引用したのはその一部である。言わんとする所は前引(2)の文と同じで、始皇帝の功業が、古の五帝三王に大きに優ることを言うのである。

(b) 「是以地無四方、民無異國、四時充美、鬼神降福、此五帝三王之所以無敵也、」(史記卷八十七李斯列伝)  
(ここを以て、地に四方なく、民に異國なし。四時美に充ち、鬼神福を降す。此れ五帝三王の敵なきゆえなり)

これは始皇帝の統一以前、秦に逐客令が出されようとした時、自身も追放の危険にあった李斯が、逐客の令に反対して上疏した文の一節である。先の(2)及び(4)に引いた上書・議論は李斯が単独でなしたものでないにせよ、彼が参加して行なったものである。そこに展開された三皇五帝論と、逐客令に反対したこの上書の五帝三王論とはいちぢるしく差異がある。(b)に見える五帝三王は、むしろ儒家に近い五帝三王で、同時にそれは呂氏春秋に通じる部分を多くも

っている。(2)に見える「天子不能制」とか同じく(4)に見える「実不称名、故不久長」などどう関係するのであろうか。統一前と後における秦の思想界の大変動が、焚書などとは別に大きく感じられる。

(6) 「三老董公、遮説漢王曰、……項羽為無道、放殺其主、天下之賊也、夫仁不以勇、義不以力、大王宜率三軍之衆、為之素服、以告之諸侯、為此東伐、四海之内、莫不仰德、此三王之舉也、漢王曰、善」(漢書卷一上高帝紀)

(三老董公、遮りて漢王に説きていわく。……項羽は無道をなし、其の主を放殺す。天下の賊なり。夫れ仁は勇を以てせず、義は力を以てせず。大王よろしく三軍の衆をひきい、これがために素服し、もってこれを諸侯につげ、これがために東伐せられよ。四海の内、徳を仰がざるなからん。此れ三王の舉なりと。漢王曰く善しと。)

此れは項羽が義帝を殺したので、漢の高祖劉邦が、項羽の大逆無道の罪を鳴らして兵を挙げ、漢中から洛陽に達した時に、三老董公が劉邦に告げた言葉である。ここに見える三王は師古注に「夏・殷・周なり」と見える。前引(4)(5)の三王も夏殷周を指すのか問題があるが、この漢書の文は三王を一つの規範として見ていることは疑いない。そこに秦代と漢代の三王観の違いが存するのを知ることができるようである。

## 一五

呂氏春秋にもまた五帝三王と連続しての使用或は五帝と三王を対にした文がかなり多く見られる。そのことごとくを挙げるのはいたずらに煩瑣におちいるので数例を引くにとどめたいが、いずれも三王を依拠すべき模範との前提に立って引用していること、三皇五帝と同様である。

「凡用意不可不精、夫精五帝三王之所以成也、」(有始覽応同篇)

(およそ意を用うること精ならざるべからず。夫れ精は五帝三王の成るゆえなり。)

「百官有司之事、畢力竭智矣、五帝三王之君民也、下固不過畢力竭智也、」(審分覽勿躬篇)

(百官有司の事は力を畢し智を竭す。五帝三王の民に君たるや、下固より力を畢し智を竭すに過ぎざるなり。)

右の二例はいずれも五帝三王を連用した例であるが、五帝と三王を対にしたものとしては、

「……此之謂至貴、士有若此者、五帝弗得而友、三王弗得而師、去其帝王之色、則近可得之矣、」(慎大覽下賢篇)

(此れをこれ至貴という。士此の如きものあらば、五帝も得て友とせず、三王も得て師とせず。其の帝王の色を去れば、則ち近づいてこれを得べし。)

「神農師悉諸、黃帝師大撓、帝顓頊師伯夷父、帝嚳師伯招、帝堯師子州支父、帝舜師許由、禹師大成贊、湯師小臣、文王・武王師呂望・周公旦、齊桓公師管夷吾、晉文公師咎犯・隨會、秦穆公師百里奚・公孫枝、楚莊王師孫叔敖・沈尹巫、吳王闔閭師伍子胥・文之儀、越王句踐師范蠡・大夫種、此十聖人、六賢者、未有不尊師者也、今尊不至於帝、智不至於聖、而欲無尊師、奚由至哉、此五帝之所以絶、三代之所以滅。」(孟夏紀尊師篇)

(神農は悉諸を師とし、黃帝は大撓を師とす。……越王句踐は范蠡・大夫種を師とす。此の十聖人・六賢者はいまだ師を尊ばざるものあらざるなり。今、尊きこと帝に至らず、智なること聖に至らず、しかも師を尊ぶことなからんと欲す。なによつて至らんや。これ五帝の絶えしゆえん、三代の滅びしゆえんなり。)

これは師を尊ばねばならぬことを説いた一篇である。前半部に神農以下越王句踐に至るまでの十六人の聖人・賢者の名とその師があげられている。その具体的な名前については、後に述べることにするが、五帝・三王・五霸の範疇に入る人物ばかりである。そして後半においては五帝三王の絶滅せし理由に触れている。世の規範とするに足る五帝・三王が何故滅んでしまったのかという疑問から出たものである。

五帝・三王が絶滅したという限りにおいて、この文章は(2)及び(4)と共通した面をもつがその理由に至っては、一方

「諸侯或朝或否」「相侵暴乱、残伐不止」であり、もう一方は「尊不至於帝、智不至於聖、」で全く次元を異にしている。

すでにこの文章において、五帝・三王・五霸という系列にそつての記述がみられるが、これを連続した時代として把握した文例も認められる。

「五帝先道而後徳、故徳莫盛焉、三王先教而後殺、故事莫功焉、五伯先事而後兵、故兵莫彊焉、当今之世、巧謀並行、詐術通用、攻戰不休、亡国辱主愈衆、所事者末也、」(季春紀先己篇)

(五帝は道を先にして徳を後にす。故に徳はこれより盛んなるはなし。三王は教を先にして殺を後にす。故に事これより功なるはなし。五伯は事を先にして兵を後にす。故に兵これより彊なるはなし。当今の世、巧謀ならび行われ、詐術は通に用いらる。攻戦は休まず、亡国辱主はいよ／＼衆し。事とする所のもの末なればなり。)

当今の世を含めて、時代が上古にさかのぼるほど、徳盛んなるものがあつたという尚古思想を見出すことができる。これも(2)(4)の文とは全く対立した考え方であり、秦統一後は否定されてしまうものである。同じような考えは次の文にも見られる。

「昔舜、欲旗古今而不成、既足以成帝矣、禹欲帝而不成、既足以正殊俗矣、湯欲繼禹而不成、既足以服四荒矣、武王欲及湯而不成、既足以王道矣、五伯欲繼三王而不成、既足以爲諸侯長矣、孔丘墨翟欲行大道於世而不成、既足以成顯名矣、夫大義之不成、既有成矣、」(有始覽論大篇)

(昔舜、古今を旗めんと欲してならず。すでに帝と成るを以て足れりとす。禹は帝たらんと欲して成らず。すでに殊俗を正すを以て足れりとす。湯は禹を繼がんと欲して成らず、すでに四荒を服するをもって足れりとす。武王は湯に及ばんと欲して成らず、すでに王道をもって足れりとす。五伯は三王を繼がんと欲して成らず、すでに諸侯

長たるをもつて足れりとす。孔丘墨翟は大道を世に行わんと欲して成らず、すでに顕名を成すをもつて足れりとす。それ大義の成るあり。

舜—禹—湯—武王（三代）—五伯—孔丘墨翟と後者が前者の域に達しなかったという。  
次に

「天下雖有有道士、国猶少、千里而有一士、比肩也、累世而有一聖人、繼踵也、士与聖人之所自来、若此其難也、而治必待之、治奚由至、雖幸而有、未必知也、不知則与無賢同、此治世之所以短、而乱世之所以長也、故王者不四、霸者不六、亡国相望、囚主相及、得士則無此之患、此周之所封四百余、服国八百余、今無存者矣、雖存皆當亡矣、」（先識覽觀世篇）

（天下に有道の士ありと雖も、国にはなお少し。千里にして一士あるは肩を比ぶるなり。累世にして一聖人あるは、踵を繼ぐなり。士と聖人のよりて来る所、此の如くそれ難し。而して智は必ず之に待つ。治なによつて至らん。幸いにしてありといえどもいまだ必ずしも知らず。知らざれば賢なきと同じ。此れ治世の短き所以にして、乱世の長き所以なり。故に王者は四ならず、霸者は六ならず。亡国相望み、囚主相及ぶ。士を得れば此の患なし。此れ周の封する所四百余、服国八百余、今に存するものなし。存すと雖も皆まさに亡ぶべし。）

ここには一治一乱があるという孟子流の考え方とはやや異なり、乱世は治世より長いこと、治世は永続するものでなく、必ず亡ばねばならぬことが論ぜられている、それを避ける為には君主が一日を慎み、その世を終わる必要があると続くのであるが、ここでは三王五霸のついに四王六霸であり得なかったことが一例として取上げられている。

三王・五霸はまた、それ単独でも用いられるこというまでもないが、同時に呂氏春秋には三王之佐という表現が多く見られる。

「昔、上世之亡主、以罪為在人、故日殺僇而不止、以至於亡而不悟、三代之興王、以非為在己、故日功而不衰、以至於王」(季春紀論人篇)

「昔、上世の亡主は罪をもつて人にありとなす。故に日に殺僇してやまず、もつて亡ぶるに至りても悟らず。三代の興王は罪をもつて己にありとなす。故に日に功ありて衰えず、もつて王たるに至る。」

「聰言不可不察、不察則善不善不分、善不善不分、乱莫大焉、三代分善不善、故王、」(有始覽聰言篇)

「言を聴きては察せざるべからず。察せざれば則ち善と不善と分かれず。善と不善と分たれざれば、乱これより大なるはなし。三代は善と不善とを分つ。故に王たり。」

「三代之所貴、無若賢也」(侍君覽召類篇)

(三代の貴ぶ所賢に若くはなし)

など三王或いは三代の興隆した理由がいろいろと述べられている。ところが三王の場合には三王の佐という言葉が使われるのである。三皇・五帝の場合には、三皇之佐、五帝之佐というような表現は取られていないのである。そこには三皇・五帝と三王に対する受け取り方の差があるように感ぜられる。

「嘗試觀上古記、三王之佐、其名無不榮者、其美無不安者、功大也、詩云、有暉淒淒、興雲祁祁、雨我公田、遂及我私、三王之佐、皆能以公及其私矣、俗主之佐、其欲名実也、与三王之佐同、而其名無不辱者、其美無不危者、無公故也、」(有始覽務本篇)

(こころみに上古の記を觀るに、三王の佐、其名榮ならざるものなく、その実安からざるものなきは、功大なれ

ばなり。詩に云う「小雅大田」有暵凄々たり、雲を興すこと祁々たり。我が公田に雨ふりて遂に我が私に及ぶと。三王の佐は皆よく公を以てその私に及べり。俗主の佐は其の名実を欲するや三王の佐と同じ、しこうして其の名辱められざるものなく、其の実危うからざるものなきは、公無きが故なり。

全く同内容の文章が、士容論務大篇にも見える。務大篇においては、上古記を上志に作り、「詩云……皆能以公及其私矣」までを欠いている。その結果、三王の佐と俗主の佐との対比が、一層はつきりとあらわされている。

「有道之士、未遇時、隱匿分竄、勤以待時、時至、有従布衣而為天子者、有従千乗而得天下者、有従卑賤而佐三王者、有従匹夫而報万乗者、故聖人之所貴、唯時也、」(孝行覽首時篇)

(有道の士、いまだ時にあわざれば、隱匿分竄し、つとめてもって時を待つ。時至れば布衣よりして天子となるものあり、千乗よりして天下を得るものあり。卑賤よりして三王に佐たるものあり、匹夫よりして万乗に報ずるものあり。故に聖人の貴ぶ所は唯時なり。)

この文において貫かれている主題は時であり、時機にあうか否かによって、隱匿分竄の生活を送るか、世に出るかが定まるといふ。史記伯夷列伝の「巖穴之士、趨舍有時、」とあるものと相通じるものである。三王に佐たるものもその一例として取りあげられている。

ところで呂氏春秋には又六王五伯という表現をする箇所がある。

「備説、非六王五伯、以為堯有不慈之名、舜有不孝之行、禹有淫湎之意、湯武有放殺之事、五伯有暴乱之謀、世皆譽之、人皆諱之惑也、故死而操金椎以葬、曰下見六王五伯、將敵其頭矣、辨若此、不如無辨、」(仲冬紀当務篇)

(備に説いて六王五伯を非とし、おもえらく。堯に不慈の名あり、舜に不孝の行あり、禹に淫湎の意あり、湯武に放殺の事あり、五伯に暴乱の謀あり。世みなこれを譽め、人みなこれを諱むは惑えるなりと。故に死して金椎を

操りてもって葬りていわく、下、六王五伯を見ればまさにその頭を敲たんとすと。辨かくの如くなるは辨なきにしかず。

六王とは何を指すか。例えば左伝昭公四年には啓、湯王、武王、成王、康王、穆王をいうなどであるが、高誘の注には堯、舜、禹、湯、文、武を指すと見える。ただし本文には文王の名は見えない。六王の解釈にも種々あったようである。

## 一七

次に時代はやや下るが五覇のみを使用したものを引用する。

(7) 「李斯説秦王曰、……昔者、秦繆公之覇、終不東并六国者何也、諸侯尚衆、周德未衰、故五伯迭興、更尊周室、自秦孝公以来、周室卑微、諸侯相兼、閩東為六国、秦之乗勝役諸侯、蓋六世矣、今諸侯服秦、譬若郡県……今、怠而不急就、諸侯復彊、相聚約從、雖有黄帝之賢、不能并也、」(史記卷八十七、李斯列伝)

(李斯秦王に説いていわく、……むかし秦繆公の覇たるや、ついに東して六国をあわせざるは何ぞや。諸侯なお衆く、周徳いまだおとろえず、故に五伯たがいに興り、こもく周室を尊べばなり。秦孝公より以来、周室卑微にして諸侯相い兼ね。閩東は六国となる。秦の勝に乗じて諸侯を役するけだし六世なり。今諸侯秦に服することたとえは郡県の如し。今、怠りて急になさざれば諸侯また彊く、相聚りて從を約す、黄帝の賢ありといえども、あわすあたわざるなり。)

これも秦の一統以前の文であるが、李斯が秦の宰相呂不韋の推薦によって郎となることができた後、秦王政(始皇帝)に向つて自説を述べた際の一節である。この所は李斯が秦王に対して、すみやかに中国統一の事業に邁進することを勧めたものである。文中に五伯(五覇)の文字が見える。周室衰亡後、五覇が出現したことを説いたもので、何



ら異とすることはない。ただ五覇に何を数えるかについては様々の説がある。即ち齊の桓公・晋の文公・楚の莊王・呉王闔閭・越王句踐(荀子王霸篇)。齊の桓公・晋の文公・秦の穆公・宋の襄公・楚の莊王(孟子趙岐注)。齊の桓公・晋の文公・秦の穆公・楚の莊王・呉王闔閭(白虎通)。などの諸説である。李斯が五伯といった場合、その中にどういふ人物を考えていたかは明かでないが、最初に秦の穆公と言ひ、つづいて五伯を持ち出したこと、また李斯が荀子の門人であつたことなどから、自然その内容は推測できる。

ところでこの文中には「秦之乗勝役諸侯、蓋六世矣」なる語があり、六世とは秦の孝公・惠文王・武王・昭王・孝文王・莊襄王であるとは張守節の正義の説く所である。孝公から六世を経て秦王政あなたの時代になつたから、この際意らずに天下統一にあたられよ、万世の一時なり(万世に一時の機会である)とも李斯はいつている。ここに六世という語を持ち出して統一の完成を強調する伏線としてゐるのは秦水徳説「數以六為紀」と関連があるのではなからうか。この水徳説については有名な次の文がある。

(8) 「始皇推終始五徳之伝、以為周得火徳、秦代周、徳従所不勝、方今水徳之始、」(史記卷六始皇帝本紀 二十年条)


(始皇は終始五徳の伝を推しておもえらく。周は白徳を得。秦は周に代わる。徳は勝たざる所に従う。方今水徳の始なり)

古代中国では王朝交代を説明する理論として、五行説が行われた。(8)の史料は秦が水徳にあたることを主張した部分である。呂氏春秋の五行思想と五帝徳、或いは秦水徳説については前稿引用の文献の外に森鹿三「唯水史観」がある。(史村三十二卷二号)

次に五帝の一人一人についての記述に触れねばならぬが、紙数の関係もあり、次号にゆずることとする。

註

① 周礼夏官職方氏に「乃辨九服之邦国、方千里曰王畿」とあり、孟子に「天子之地方千里」(告子下)・「天子之制、地方千里」(万章下) などとある。

② 司馬貞の索隠には「按天皇地皇之下、即云秦皇、当人皇也、而封禪書云、昔者、太帝素女鼓而瑟悲、蓋、三皇已前称秦皇、一云秦皇太皇也」とあり、秦皇人皇説をとり、河図に見える三皇説に一致させている。しかし易経に泰は  乾下坤上の卦で、彖伝に「是天地交而万物通也」と見えるから、天皇、地皇、そしてその両者から出た秦皇というように考えてもよいように思う。

③ 羅根 沢 「呂氏春秋反古考」(古史弁六)

竹岡 八雄 「呂氏春秋十二紀について」(東洋の文化と社会5)

相原 俊二 「『呂氏春秋』の時令説」(史学雑誌七十六篇十二号、七十七篇一号)

④ 三皇五帝については周礼春官外史に、「三皇五帝の書をつかさどる」。莊子天下篇に「三王五帝」と見えるのが、初めて記録にあらわれた例とされている。なお

飯島 忠夫 「三皇五帝について」(史潮第一卷第二号)

津田左右吉 「天皇考」

呂 思勉 「三皇五帝考」(古史弁七)

⑤ 例えば筑摩書房世界文学大系所収の史記(小竹文夫、小竹武夫共訳)では(4)の三王を三皇に作っている。

⑥ 太平御覧 七七皇王部引呂氏春秋には「三王先德而後事故功莫大焉」に作る。

⑦ 衛聚賢 五霸考説(説文月刊一・一)